平成十四年歌会始御製御歌及び詠進歌

春

御　製

園児らとたいさんぼくを植ゑにけり地震(なゐ)ゆりし島の春ふかみつつ

皇后陛下御歌

光返(かへ)すもの悉(ことごと)くひかりつつ早春の日こそ輝かしけれ

皇太子殿下

青春をわが過ごしたる学び舎に新入生の声ひびくなり

皇太子妃殿下

生(あ)れいでしみどり児のいのちかがやきて君と迎ふる春すがすがし

文仁親王殿下

ふきのたう雪解けの地に顔いだし春の訪れ近しと思ふ

文仁親王妃紀子殿下

冬枯れし庭のしばふも春の陽にひごとみどりの色をましゆく

清子内親王殿下

降りやみてあしたいよいよ春めかむ窓にきき入る苑の雨音(あまおと)

正仁親王殿下

春の日のあまねく照らす那須の野にはるりんだうは青ふかく咲く

正仁親王妃華子殿下

春ふかく山なみつづく那須の原みやま桜はほのぼのと咲く

崇仁親王妃百合子殿下

わが庭の春のおとづれまづ見えてミモザアカシアはなやぎて咲く

寛仁（ともひと）親王妃信子殿下

光る海みどりの木々を前にして朝明（あさけ）の卓に春を思へり

憲仁親王殿下

春の陽にかげろふゆらぐ新雪の斜面みおろしいざ滑りなむ

憲仁親王妃久子殿下

川岸に巣づくりはげむかはがらす春はやき水つめたく透けり

召人　扇畑忠雄

春の野にわが行きしかば草なびけ泉かがやくふるさとの道

選者　武川忠一

歳月の嵩(かさ)踏みて立つ山の路春りんだうは丈低く咲く

選者　安永蕗子

月明に梅花水藻(ばいかみずも)の花ひらくいちはやきかな夜天の春は

選者　岡野弘彦

春の潮伊豆の島根によせくるを天城のみねに見はるかし立つ

選者　岡井　隆

ながく永く待ちにし春に会はむとしするどくとがる花の芽われは

選者　島田修二

うぶすなの浦賀の海を言ふほどに春のうしほのただにきらめく

選　歌　（詠進者生年月日順）

ブラジル国サンパウロ州州　中村教二

野に山にイッペイの花咲き満ちて吾がうまごらの国の春なり

静岡県　瀧本義昭

積み上げし堆肥押しのけ出づる芽の先のするどき春となりけり

島根県　小田裕侯

昨夜(きぞ)ふりし春雪を身に浴びながら幹をめぐりて杉の枝うつ

鹿児島県　中屋清康

青春の汗にまみれて声ふとくラガーの一団駆けぬけて行く

東京都　工藤政尚

噴気たち泥流島をおほふとも海青ければ春の待たるる

岐阜県　奥井重敏

とぶとりの明日香の春は坂多し貸自転車のかすかに軋む

神奈川県　岩﨑幸子

春雨の軽きリズムを新しき傘に聞きつつ汝(な)に会ひに行く

神奈川県　大矢節子

トルストイの民話読みたる春の午後父の匂ひのページに眠る

群馬県　里見佳保

朗読は春の章へと入りたりそのやうに君と繋がつてゆく

大阪府　中迫克公

トンネルのむかうにみえる僕の春かすかなれどもいつか我が手に

佳　作　（詠進者生年月日順）

香川県　小谷キミ

悲しみを隠す春かと思ふほど桜は咲きぬ雨にぬれつつ

大分県　隈井良幸

雪霽れて春の星宿みづみづしと子が野辺山の真夜を伝へ来

福島県　和田澄子

おもひきり自転車を漕ぎ春野ゆく人工関節膝に馴染みて

東京都　中山　巖

そそり立つあけぼの杉は早春の空の蒼さを突きさす如し

千葉県　増田幸一

深雪も根雪もゆるみ白神は芽吹きわたれり春の日ざしに

神奈川県　秋吉美代子

日はとろり鵜の声とろり春の磯八十路の夫とひじき刈るなり

長野県　土橋俶子

羚羊（かもしか）は静かに立ちて吾を見つ萌えやはらかき春の高みに

新潟県　戸田正太郎

春の日のぬくとき庭に放ちたる鶏は互ひに羽ばたき合ひぬ

福島県　納谷光男

残雪にけもの通りし跡のあり春を隣にみちのくの山

鹿児島県　小園和代

春あさき天空めざし旅立ちぬバイカルゆきの風にのる鶴

栃木県　武藤幸子

春の陽を浴みつつ夫が帰り来る新しき職の夜勤を終へて

東京都　髙橋裕子

やまひもちて生まれし重き命の子ふたたびめぐる春のよろこび